
媚・日常・外発的で三題話

西谷 黙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

媚・日常・外発的で三題話

【著者名】

N1672Q

【作者名】

西谷 黙

【あらすじ】

部活で書いたお話を若干ダーク。

(前書き)

あ、あ……あああ、あお腹がすいた。

とあるところにお化けがいた。

お化けは小さくていつも腹を空かさせていた。
だが、それ以上にお化けは絆に飢えていた。
お化けは生まれてこのかたひとりぼっちだったので。

?

クラスは騒然としていた。

重大なことが起きたというのに、僕らに『えられた情報は酷く少ないものだった。

事件が起きてから一週間が経ち、僕らはようやく学校へ召集された。
まだ朝礼前のこの時間帯。

いつもなら騒がしいクラスメートも静かに席に着いていた。
その中に空の机が二つ、そのうちの一つは僕の隣の席だ。
塗り込めたような静けさと不気味さはそこから教室中に広がり、生徒の日常を蝕んでいった。

苑田 文哉。

机の主の名前のシールは今にも、椅子から剥がれ落ちそうにしていた。

苑田 文哉。

一週間前クラスメートを惨殺した、殺人者。

僕はクラスであまり目立つようなタイプではないが、そんな僕から見ても苑田は地味な奴だった。

空気を読める奴とかそんな次元を超えて、苑田は空気だった。

特定の友達がいないように見えた。

自分から発言をしなかった。

あくまで苑田の行動は、他人がしたことに対するリアクションに過ぎなかつた。

外発的な生き方だと、批判する奴もいなかつた。

苑田はどこまでも空気だつた。

いま顔を思い出せと言われてすぐに思い浮かべられるのは、四〇人編成の学級で何人だろう。

だが、苑田は初めからそんな地味で目立たない奴ではなかつた。
断言できる。

なぜなら、僕は苑田の幼馴染だからだ。

?

お化けはやがて友達を探して旅に出た。

お化けは自分では移動できないので人に憑いて行くことにした。

お化けは人の願いを叶える代わりに運んでもらつた。

途中、運んでもくれる人間と仲良くなることもあつた。

しかしお化けは、途中でいつもお腹が減つてたまらず人間を内側からパリパリと食べてしまうのだった。

お化けはある日、小さな男の子と出会つた。

苑田は体が小さく、そして貧弱だった。

近所の遊び友達のグループの中でおそらく一番足が遅かったので、ずっと鬼ごっこでは鬼をやらされていた。

苑田はそれが不満だったのだろう。よく一人でいじけて家に帰ってしまうことも儘あった。

そんなある日、苑田は遊びに来なかつた。

僕らは苑田抜きで遊んだ。

苑田のいない鬼ごっこは緊張感もスピード感もあって、普段よりずっと楽しかつたのを今でも憶えている。

次の日、苑田は小学校を休んだ。

高熱を出して倒れたとのことだった。

僕は得体のしれない罪悪感に駆られた。

その日の放課後、苑田の家を訪ねたがまだ熱が下がらないので会えないと門限払いされた。

翌日、お見舞いに行つた。

その時のことと、僕ははつきりと思い出せる。

青い口ケツトのパジャマ。

少し薄暗い部屋の明かり。

ストーブの上に置かれた傷んだやかんから優しく立ち昇る蒸氣。どこからかしてくる甘いにおい。

嬉しそうに弾む、苑田の声。

僕が部屋に入ると苑田はベットから上半身をおこした。

思つたよりも顔色が良かつた。

僕は安堵すると同時にどこかで拍子抜けした。

「元気そうだね」と僕はあたりさわりのなさそうなことをいつ。すると苑田は、「実はいいことがあったんだ」と息巻いて答えた。

「いいこと？」

好奇心からたずねる。

すると苑田は頷いて満面の笑顔を浮かべた。

「友達ができたんだ」

夢の中でだけね、と笑う苑田は表情に反して寂しそうだった。

?

お化けは男の子に言った。

「ボクを君の中に入れてくれたら、なんでも願いを叶えてあげるよ」

男の子は目に光を灯し、けれど弱弱しい声で願いを言った。

「ぼくの友達になって！」

お化けと男の子はすぐに仲良くなつた。

お化けも男の子も今までに感じたことがなかつた充足感と幸福を感じていた。

しかし、お化けは同時に深い悩みの渦の中にいた。

お化けは、お腹が空いてきたのだ。

?

苑田が変わりだしたのはその時からだつた。

苑田は遊びの途中で怒つて帰つてしまつことがなくなつた。

基本的に怒らなくなつた。我儘も言わない。

中学校に入るころには、苑田はいつも顔面に薄い笑顔を浮かべているようになった。

媚を売っているわけでもないのに、まるでそれ以外の表情を忘れてしまったように、いつでも笑っていた。

ただ波に身を任せるクラゲのように、苑田は流されることによじとじているように見えた。

僕は苑田とだんだん疎遠になってきていた。

そして、一週間前。

朝礼に苑田が出なかつた。

その後も現れない苑田を心配して、担任が苑田の自宅に連絡を入れたがいつもどおりの時刻に家を出たという。

苑田は学校にいた。

学校の旧校舎の普段、人が通らない所。

周りの校舎と自身を返り血で赤くしていた。

握っている包丁で目の前の死体を切つては口に運ぶ。切つては口に運ぶ。

?

お化けは男の子と一緒にいたかつたので、男の子を食べたくなかつた。

しかし、お腹が減つてお腹が減つてたまらなくなり、お化けは男の子の中身を少し食べてしまつた。

そういうことが何度かあり、男の子の中はぽつかり空洞ができてしまつた。

これ以上は食べられなかつた。これ以上食べれば、男の子はすつか

り消えてしまうだろ。う。

お化けは友達を失いたくなかったので、他の人を食べることにした。
パリパリモグモグごっくん。

?

苑田はもう正氣ではないのだという。

口を開くと、お化けと男の子の氣味の悪い話をするのだそうだ。
その内容を聞いて僕はあの日を思い出さずにはいられない。
嬉しそうに友達ができたと言う苑田に、それがなんだか悔しくて、
お化けと男の子が出てくる出鱈田な気持ちの悪い話した日を。

(後書き)

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1672q/>

媚・日常・外発的で三題話

2011年1月19日01時35分発行